



TITLE:

アメリカへ天文見學旅行の企て

AUTHOR(S):

CITATION:

アメリカへ天文見學旅行の企て. 天界 1938, 18(204): 181-183

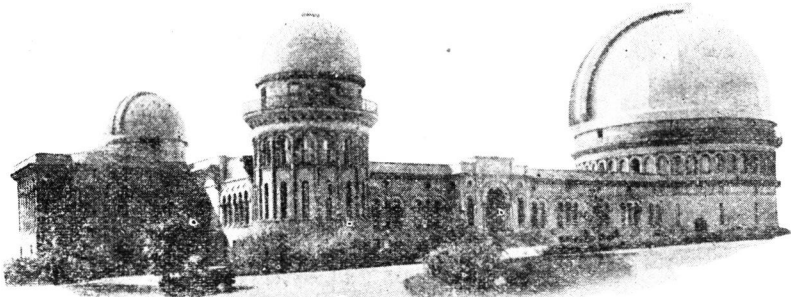
ISSUE DATE:

1938-03-25

URL:

<http://hdl.handle.net/2433/167644>

RIGHT:



アメリカへ天文見學旅行の企て

但し、これはドイツの國での今年度の新しい計畫である。

“國際的學術研究の一對象であり、又、世界の各民族間の平和的協同の一事業として、特に著しいものは天文學である。北米合衆國は社會的、學藝技術的な見地から見て、獨特な地位を占めてゐるため、専門家にもアマチュアにも同様に、此の方面のアメリカ的な發展ぶりを見學するのは有意義なことである。殊に、アメリカでは、天文研究の器械構造上に獨特な進歩を示し、其の方面に於ける尖端的地歩を占めてゐるので、此等の設備を見ることに興味は深い。ハンブルグ・アメリカ汽船會社は、アメリカの多方面に交渉を有つてゐるため、今こゝに計畫する見學旅行は、參加者がアメリカの學者同勞者たちと個人的に交友を結ぶ可能性を持つやうな豊富、且、有價值なるプログラムの組み合わせを提供する。彼地の風土や住民に關して興味深い印象を獲るのみならず、尙ほ、純なる天文學的見地や、又、天文家の眼から見るアメリカの學術の研究や技術に對し、價值高き大觀を提供するものであることが期待される”

かうした振れ出しで、ハンブルグ・アメリカ汽船會社は、アイ・ゲイ天文協會の後援協力の下に、今年の夏に天文見學旅行をする計畫を、ひろく廣告してゐる。（わが日本にまでも、勧誘狀が來てゐる！）計畫されてゐる日取りは下の通り：

6月30日（木曜日）ハンブルグ出帆。ハ・ア社の快速船“ドイツランド”號。
7月1日（金曜日）英國サザムプトン、佛國シェルブルに寄港。

- 7月2日—7日 航海。 船中各部の案内。
- 7月8日(金曜日) ニウヨーク到着。 市の中央部 Shelton ホテルに投宿。 午後は市内各所見物、夜も同様。
- 7月9日(土曜日) 午前中、理學博物館にて豊富なる隕星陳列及びヘイデン・プラネタリウム見學。 午後、エンパイヤ・ステイト・ビル、夜はラヂオ・シテイ劇場。
- 7月10日(日曜日) 市内見學。 午後、急行列車にてボストンへ。 夜、Kenmore ホテル投宿。
- 7月11日(月曜日) 午前中、ハーバード學院天文臺、及び、オクリヂ出張所見學。 午後、ハーバード大學を始め、市内の史蹟等見學。 夜は寢臺列車。
- 7月12日(火曜日) 朝、ロチェスタ着。 Bausch & Lomb 會社、Eastman Kodak 會社等を訪ひ、工場研究所等にて特に天體寫眞術を見學。 夕暮、ナイヤガラ着、夜は瀑布の絶景賞觀。
- 7月13日(水曜日) 午前中、ナイヤガラ瀑布を米加兩國側にて交々見物及び撮影。 午後も探勝。 夜、寢臺列車。 ——途中、デトロイト市に下車し、アンゼロ湖畔のマクマス天文臺見學も可。
- 7月14日(木曜日) 朝、シカゴ着。 Bismark ホテル。 午前中、市内見物。 午後シカゴ大學附近見學。
- 7月15日(金曜日) 市外キリヤムス・ベールのヤーキース天文臺へ。
- 7月16日(土曜日) 午前中、理工學博物館見學。 午後は出發、ワシントン府へ。
- 7月17日(日曜日) 朝、Wardman ホテル着。 終日市内外遊覽。
- 7月18日(月曜日) 午前中、海軍天文臺及び標準局見學。 午後、スミソン學院其の他訪問。 夜、フィラデルフィヤ到着。 Benjamin Franklin ホテルへ。
- 7月19日(火曜日) 午前中、フランクリン學院及びフェルス・プラネタリウム見學。 午後、ニウヨークへ歸還。 Shelton ホテルへ。
- 7月20日(水曜日) ロクフェラー・セントルその他の遊覽。
- 7月21日(木曜日) 早朝、ハ・ア社船“ハンブルグ號”に乗り、出帆。
- 7月28日(木曜日) シェルブルル及びサザンプトン寄港。
- 7月29日(金曜日) ハンブルグ到着。

ざつと、上の通り、折角アメリカまで渡りながら、加州のキルソン山やリク天文臺まで旅行を延ばさないのは遺憾だと思はれるが、日程が無いのだろう。

旅費は、等級により、一人1032マルク乃至1545マルクである。(表題上の圖はヤスキース天文臺)

昨年の日食に因む二小島の領有問題

昨1937年6月8日、南太平洋から南米ペルーにわたつて長時間の皆既日食があり、日本からは我が山本博士一隊がペルーへ行き、英米兩國からは太平洋上のフェニクス群島へ行き、皆々觀測に成功したことは、本誌に度々書いたことであるが、上記のフェニクス群島中に於いて、米國隊も、英國隊(ニュージーランドのMichie 氏一行)も、始めはエンダベリ島に上陸する豫定であつたのに、錨地の無いため、急にカントン島に觀測地點を變更した。

ところが、此のエンダベリ島も、カントン島も、實は其の主權が確立してゐない島であつて、觀測者間にも多少の論争があつたらしいが、其の後此の問題は表面化して、去る3月4日附ニウヨークより下の如き新聞電報が放送されることになった。

【ニウヨーク3月4日發】 米國政府は、中部太平洋フェニクス群島内のカントン及びエンダベリ兩島が米國領なる旨を近く宣言すべく、既に諸般の準備を整へ大統領令の署名を持つばかりになつてゐると傳へられる。

カントン、エンダベリ兩島歸屬問題に就き、ハル米國務長官は3月4日「英國との間に意見交換が行はれてゐるのは事實であるが、交渉といふ域にはまだ達してゐない」と語つた。この「意見交換」は、昨年の日食觀測の際米國とニュージーランドとの衝突事件によつて開始されたもので、米海軍並に地理學界の調査によると、フェニクス群島は八個の島から成り、1791年から1828年の間に米國捕鯨船によつて發見され、カントン島は1860年より1880年の間、海鳥の糞を集める米國人が住んでゐたが、その後は無人島で、六ヶ月前日食の際初めて問題となつたものである。ハルと云ふ島には2年前から英國人が住んでゐるが、エンダベリその他の島は現在なほ無人島である。〔花山急報、280〕